様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００４４

研究課題名（和文）芸能復興と被災地ツーリズム

研究課題名（英文）Recovery of Traditional Performing Arts and Dark Tourism at Disaster Sites

研究代表者
橋本　裕之（HASHIMOTO, Hiroyuki）

追手門学院大学・地域創造学部・教授

研究者番号：７０２０８４６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、壊滅的な打撃を受けた地域社会の復興や再生に際して、民俗芸能のもつ特筆すべき力や役割をフィールドワークによって実証した上で、その効果を持続させる仕組みとして被災地ツーリズムの導入の方法を検討することにある。事例として岩手県の普代村を拠点とする鵜鳥神楽をとりあげた。東日本大震災以後の神楽衆の苦闘は、陸中沿岸各地の芸能団体に共通するものであるが、広域の信仰に支えられた鵜鳥神楽は社会的なインパクトが大きく、その動向は注視に値する。本研究は東日本大震災以後の巡行記録に関して情報集約とデータ分析を行なうとともに、コミュニティ再興の一助としての被災地ツーリズムの可能性を実証的に検証した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to demonstrate the noteworthy power and the role of folk performing arts by fieldwork in the reconstruction and revitalization of communities that have suffered catastrophic blows, and as a mechanism to sustain its effect, to examine ways to introduce disaster-stricken tourism. Unotori Kagura based in Fudai village in Iwate prefecture was taken up as a case. Although the struggle of the Kagura members after the Great East Japan Great Earthquake is common to the groups of folk performing arts around coastal areas, Unotori Kagura supported by wide-ranging belief has a great social impact and its trend is worth watching. This research gathered information and analyzed data on the tour record after the Great East Japan Earthquake and verified the possibility of disaster-stricken tourism as some help for community revival.

研究分野：芸能産業論

キーワード：芸能復興　被災地ツーリズム　地域社会　民俗芸能　コミュニティ再興　鵜鳥神楽　宿　東日本大震災

１．研究開始当初の背景

学術的背景として研究開始当初の先行研究と経緯を概説しておきたい。先行研究は２つの領域が存在している。１つは(a)災害後の文化によるコミュニティ復興の研究、もう１つは(b)負の状況や遺産を文化的シンボルとして活用するダークツーリズムの研究である。(a)文化によるコミュニティ復興研究は、Ashimsa-Putra (編)の“Artistic Responses to Disasters; the Case of Yogyakarta”（2007）を嚆矢とするが、東日本大震災以降に研究は国内でも一気に加速化した。人類学の林勲男「民俗芸能の被災と復興にむけて」(2012)、民俗学の政岡伸洋「暮らしの文化と復興に向けての課題」(2012)、民俗芸能学会（編）「東日本大震災被災地の民俗文化財報告」(2012)等が現われた。とりわけ代表者（橋本）の「祭を再開する理由―東日本大震災以降の現状と課題」（2012）、「細く長く続けたい ―民俗芸能支援の現在進行形」（2012）等は現地の復興実践に強い影響を与えた。一方、(b)ダークツーリズムは戦跡や被災地などを訪ねて人類の負の歴史に対する理解を深める観光形態であり、Lennon と Foley の“Dark tourism”(2000)を研究の嚆矢とするが、分担者（井出）の「日本型ダークツーリズムの可能性」（2012）は本研究の出発点となっている。

本研究に至った経緯は、岩手県文化財保護審議会委員の無形民俗文化財担当者として県指定等の業務に従事していた代表者（橋本）が東日本大震災以降の陸中海岸の民俗芸能の被害悉皆調査を行なう過程で、巡行系の山伏神楽の復興の重要性を提唱して、具体的な支援行動を起こしたことを発端とする。沿岸コミュニティの壊滅による神楽上演の場の消失は、文化のみならずコミュニティ再生の拠点の消失にもつながることから、「場」の再興を目的とした支援と研究を精力的に行ない、着実な実践成果（リスクヘッジ的な７回の関西公演、神楽会場〔＝「宿」という〕の財政的支援等）をあげてきた。本研究はそうした成果を継承しながらも、新たなチャレンジ、すなわち旅行業者との連携による宿の構築を試み、文化による実効性の高いコミュニティ再生の道筋を明示しようとしたのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、壊滅的な打撃を受けた地域社会の復興や再生に際して、民俗芸能のもつ特筆すべき力や役割をフィールドワークによって実証した上で、その効果を持続させる仕組みとして被災地ツーリズムの導入の方法を検討することにある。事例として岩手県の普代村を拠点とする鵜鳥神楽をとりあげる。東日本大震災以後の神楽衆の苦闘は、陸中沿岸各地の芸能団体に共通するものであるが、広域の信仰に支えられた鵜鳥神楽は社会的なインパクトが大きく、その動向は注視に値する。本研究は東日本大震災以後の巡行記録に関して情報集約とデータ分析を行なうとともに、コミュニティ再興の一助としての被災地ツーリズムの可能性を実証的に検証して、その方法論を提示する。

３．研究の方法

本研究は、(a)コミュニティ再生にはたす民俗芸能のもつ力や役割を実証した上で、(b)被災地ツーリズムを試行し、その方法論を検討することにある。３年計画のうち、当初は前者に重心を置き、震災以後の活動記録（文献、映像、メディア記事等）を集約するとともに、「宿」上演の企画・運営に当事者とともに関わり、コミュニティへのインパクトなどを検証（アンケート分析、インパクト評価等）する。ついで後者へと重心を移し、芸能を軸とする被災地ツーリズムを試行的に企画・運営し、その結果について評価等を行ない、陸中海岸における民俗芸能によるダークツーリズムの可能性、方法等について検討・提案する。また、研究成果をシンポジウム、論文集という形で世に問う。なお、代表者（橋本）は関西の大学に研究拠点をもつものの、岩手県文化財保護審議会委員（当時）を兼任し、分担者１名（見市）とともに常時、陸中沿岸の芸能の活動状況を把握できる立場にある。他の分担者（井出）は日本におけるダークツーリズム研究の第一人者であり、もう１名（中川）は社会包摂型アーツマネジメント研究の第一人者である。

４．研究成果

初年度（平成 26 年度）は代表者（橋本）が中心となって平成 23 年度から実施してきた「宿」上演の支援・調査を継承した。実際は 8 月末に岩手県の大槌町赤浜において鵜鳥神楽の「宿」上演を実施するための予備的な現地調査を行なった。これはツーリズムと連動させた神楽上演を試行的に実施して、次年度以降の本格的なツーリズム・パフォーマンスに発展させるための予備的研究として位置づけられる。また、普代中学校の神楽同好会が伝承している中野流鵜鳥七頭舞のアメリカ公演が開催されたため、参与観察的な現地調査を行なった。中野流鵜鳥七頭舞は鵜鳥神楽における舞込みの部分が発展したスピンオフ的なパフォーマンスであるが、東日本大震災以後、普代村における復興のシンボルとして位置づけられており、ツーリズムと連動させた上演の可能性を確認することができた。

実際、中野流鵜鳥七頭舞についていえば、帰国後にこうした気運が高まっている。また、鵜鳥神楽をとりあげた被災地ツーリズムは、初年度にも普代村黒崎、岩泉町安家、野田村下安家などにおいて試行的に実施されており、次年度に向けた「宿」上演の支援・調査に関する環境が整ってきた。また、東日本大震災以後のコミュニティ再興に関する民俗

芸能の全般的な役割をとりあげた記録・資料等は、初年度の段階でほぼ集約することができたと考えている。なお、メンバーによる研究会を大阪で実施した。

2 年度（平成 27 年度）は本格的な現地調査の段階に入っているが、引き続き代表者（橋本）が中心となって平成 23 年度から実施してきた「宿」上演の支援・調査を継承した。実際は 5 月の鵜鳥神社例大祭と赤比羅神社例大祭において、従来の上演形態について現地調査を行なった。また、6 月～7 月に久慈市大尻と麦生の公民館公演、8 月に秋田県由利本荘市の鳥海獅子まつり、11 月に岩手県盛岡市のおでって芸能館において、新しい上演形態について現地調査を行なった。いずれもツーリズムと連動させた神楽上演の必要性を確信することができた。とりわけおでって芸能館は多数の観客が集まり大きな反響があり、ツーリズムと連動させた神楽上演に関する具体的な方法を示唆するものであった。

そして、1 月～3 月に 10 数回開催された「宿」上演について、参与観察的な現地調査をできるかぎり行なった。伝統的な「宿」に関しても、新しい上演形態が模索されており、ツーリズムと連動させた上演の可能性を確認することができた。鵜鳥神楽をとりあげた被災地ツーリズムは、2 年度にも普代村黒崎においてモデルケースとして試行的に実施されており、「宿」上演の支援・調査に関する環境がいっそう整ってきている。また、東日本大震災以後のコミュニティ再興に関する民俗芸能の全般的な役割をとりあげた記録・資料等は、初年度でほぼ集約できたと考えているが、以降も最新の成果を中心として収集する作業を継続しており、質量とも充実させた。なお、メンバーによる研究会を 3 月に大阪で実施した。

3 年度（平成 28 年度）も代表者（橋本）が中心になって平成 23 年度から実施してきた「宿」上演の支援・調査を継承した。実際は 5 月の鵜鳥神社例大祭において、従来の上演形態について現地調査を行なった。また、7 月に久慈市麦生のあーとびる麦生公演、10 月に花巻市大迫町の全国神楽大会ハヤチネにおいて、新しい上演形態について現地調査を行なった。そして、1 月～3 月に継続的に開催された「宿」上演について、岩泉町安家と普代村堀内において参与観察的な現地調査を行なった。伝統的な「宿」に関しても、新しい上演形態が定着してきており、ツーリズムと連動させた上演の可能性を確認することができた。なお、研究の成果を発表する機会として、普代村堀内における「宿」上演に先立って、メンバーのみならず神楽衆や「宿」を主催する宿主をも交えて神楽宿フォーラムを実施した。

以上見てきたとおり、本研究は数年間にわたって、鵜鳥神楽を介した被災地ツーリズムの可能性を検討してきた。その内容は被災地における民俗芸能に関する調査研究という地平を踏み越えて、アクションリサーチに依拠した社会実装の実験的研究をめざしたものであった。こうした活動は現在も進行中であるが、ここで民俗芸能支援の 3 段階をあげておきたい。第 1 段階は用具や装束を購入する資金を助成することである。第 2 段階は用具や装束を保管したり練習したりする空間を確保することである。第 3 段階は当事者が地元で働ける雇用環境を整備することである。用具や装束そして空間を用意することができたとしても、働き口がなければ地元に住むことはできない。人間がいなくなってしまったら、民俗芸能を続けることもできないのである。

現在も諸段階は重層的に同時進行しており、数多くの民俗芸能団体が依然として苦しい状況に置かれている。そして、いくつかの民俗芸能団体は第 4 段階とでもいうべき方法を講じている。それは当事者が部外者を参加させて民俗芸能を協働することである。こうした動向は第 3 段階が当事者にも部外者にも手に負えない課題であることを認識しているからこそ、自分たちの身の丈で考えられる方法を模索した結果であるといえそうだが、民俗芸能支援がいわゆる支援という従来の枠組みを脱して、協働という新しい段階に入っていることを示唆しているようにも思われる。場に対する関心に沿っていえば、当事者と部外者が協働して新しい場を構築する試みが生み出されているともいえるだろう。

代表者（橋本）はかつて「現在は民俗芸能支援の第三段階として、民俗芸能団体のメンバーが地元で働ける雇用環境を整備することが求められている。そうでなければ、誰も住まない場所に新しい物品と新しい倉庫だけが残されるという悪夢が現実化してしまいかねない。これはもはや民俗芸能支援の範囲を逸脱しているが、民俗芸能団体を支援することは不可避的にかくも長期的な難問を呼び起こすのである。」（橋本裕之「細く長く続けたい－民俗芸能支援の現在進行形－」『震災と芸能－地域再生の原動力－』、追手門学院大学出版会、2015 年、83－84 頁）と述べている。

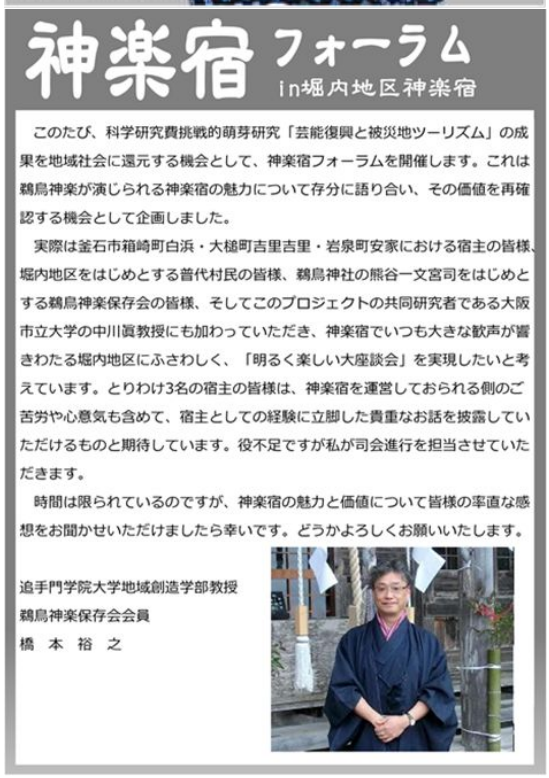
今後の可能性についていえば、雇用環境が整備されないかぎり、民俗芸能を培ってきた場を維持することも難しいと思われるが、そのような場は地域社会を再建することのみならず、地域観光を振興することにも資するはずである。雇用環境に直結しないとしても、民俗芸能を介して経済的な効果を生み出せないだろうか。かくして、本研究は鵜鳥神楽を介した被災地ツーリズムのプロジェクトをいくつか手がけてきたわけである。いずれも残念ながら雇用環境を整備することに直結しているということはできないが、本研究は民俗芸能を培う新しい場を構築する試みであるのみならず、民俗芸能を活用した被災地ツーリズムの可能性を模索する試みでもあるということができるだろう。

観光客が鵜鳥神楽の神楽宿を体験するというアイデアは平成 26 年 2 月以降、現時点で合計 4 回実現している。一例として、初年度に実施された平成 27 年 2 月の概要を紹介しておきたい。この年は２月 21～22 日に観光庁のモニターツアーとして実施することができた。前年同様、普代村の黒崎公民館において JTB コーポレートセールスにかかわってもらい、「普代村こうりゅうものがたり鵜鳥神楽の神楽宿と交流の旅」という東京発のツアーを実施したのである。17 名の観光客が参加した。

観光客は 2 月 21 日、黒崎公民館で地元の住民に混じって鵜鳥神楽を楽しみ、直会において前年同様、煮しめ、焼き鮭、早採りワカメのしゃぶしゃぶなどを堪能した。翌 22 日は語り部ガイドに案内されて、鵜鳥神社、普代水門、太田名部防潮堤などを見学した後、前日に神楽宿を体験した黒崎公民館に移動した。そして、黒崎自治会が用意していた漁業体験メニューとしてワカメの芯抜きを体験する一方、郷土料理教室として小豆ばっとうと八杯豆腐を調理することにも参加して、その場に居合わせた全員で普代の味を堪能したのである。観光客の満足感はあらためて強調するまでもないだろう。これは神楽宿が培ってきた、充足した雰囲気を体感してもらう機会であったともいえそうである。

当事者と部外者が民俗芸能を協働する。こうした第 4 段階が恒常的に続くものかどうかはよくわからない。少なくとも現時点において将来を語ることはむずかしい。性急に一般化することができるわけでもないだろう。民俗芸能団体の人手不足を解決するためにも、当事者が地元で働ける雇用環境を整備することは最も効果的な方法なのだろうが、当事者にも部外者にも手に負えない課題であることも事実である。そう考えていけば、当事者と部外者が民俗芸能を協働することは、意識しているか否かはともかくとしても、自分たちの身の丈で考えられる方法を模索した結果であるといえそうである。民俗芸能支援はいわゆる支援という従来の枠組みを脱して、協働という新しい段階に入っているのかもしれない。

そうだとしたら、本研究における研究成果を地域社会に還元する機会として平成29年3月 25 日に普代村堀内の堀内地区漁村センターにおいて開催した神楽宿フォーラムは、当事者と部外者が協働するという意味においても象徴的な機会であったと考えられるだろう。実際は普代村堀内における鵜鳥神楽の神楽宿に連携協力することによって、堀内地区に神楽宿の会場を提供していただき、舞込み後に 1 時間だけ拝借して、神楽宿フォーラムを実施することができた。岩泉町安家・釜石市箱崎町白浜・大槌町吉里吉里の宿主、神楽衆、普代村民、普代村役場の関係部局における担当者、ツアーに参加した観光客（岩手県北交通のツアーが 20 名、JTB のツアーが 16 名)、そして分担者（中川）も参加して、多種多様なかたちで鵜鳥神楽にかかわる人々が一堂に会して、神楽宿の魅力と価値について語り合った。司会は代表者（橋本）が担当した。とりわけ 3 名の宿主は神楽宿を運営する側の心意気や気苦労も含めて、宿主としての経験に立脚した貴重な談話を披歴した。約 150 名が参集して、大変な盛況だったことを強調しておきたい。



神楽宿 フォーラム
in堀内地区神楽宿

このたび、科学研究費挑戦的萌芽研究「芸能復興と被災地ツーリズム」の成果を地域社会に還元する機会として、神楽宿フォーラムを開催します。これは鵜鳥神楽が演じられる神楽宿の魅力について存分に語り合い、その価値を再確認する機会として企画しました。

実際は釜石市箱崎町白浜・大槌町吉里吉里・岩泉町安家における宿主の皆様、堀内地区をはじめとする普代村民の皆様、鵜鳥神社の熊谷一文宮司をはじめとする鵜鳥神楽保存会の皆様、そしてこのプロジェクトの共同研究者である大阪市立大学の中川眞教授にも加わっていただき、神楽宿でいつも大きな歓声が響きわたる堀内地区にふさわしく、「明るく楽しい大座談会」を実現したいと考えています。とりわけ3名の宿主の皆様は、神楽宿を運営しておられる側のご苦労や心意気も含めて、宿主としての経験に立脚した貴重なお話を披露していただけるものと期待しています。役不足ですが私が司会進行を担当させていただきます。

時間は限られているのですが、神楽宿の魅力と価値について皆様の率直な感想をお聞かせいただけましたら幸いです。どうかよろしくお願いいたします。

追手門学院大学地域創造学部教授
鵜鳥神楽保存会会員
橋 本 裕 之

だが、神楽宿の魅力と価値は今日、地元に住む人々ですら必ずしも十分に理解してい

ないようにも思われる。したがって、本研究を締めくくった神楽宿フォーラムは文字どおり当事者と部外者が協働して神楽宿の魅力と価値を再発見する機会として、今後の可能性を模索するためにも大きな役割をはたしたはずである。したがって、神楽フォーラムは本研究が被災地における民俗芸能に関する調査研究という地平を大きく踏み越えて、アクションリサーチに依拠した社会実装の実験的研究を意図していたことを端的に表現していたということができるだろう。

数多くの民俗芸能団体が東日本大震災以降、極限的な状況に追い込まれながらも、自分たちの民俗芸能に元の姿を取り戻すため、文字どおり試行錯誤してきた。にもかかわらず、民俗芸能の本来的な存在形態を維持することは、もはやきわめて難しいだろう。だからこそ、当事者と部外者が協働して新しい場を構築する試みが生み出されているともいえるのである。本研究は民俗芸能を復興する／させる方法の現在進行形として、当事者と部外者が民俗芸能を協働する地点に到達したようにも思われる。こうした消息は民俗芸能の本来的な存在形態を破壊する契機として、否定的に受け止められてしまうかもしれない。だが、協働という新しい段階を肯定的に理解することによって、被災した民俗芸能に元の姿を取り戻すことのみならず、民俗芸能の新しい可能性を再創造／再想像することにも役立つ有力な手がかりが得られるはずである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計６件）
① 橋本裕之「拡張する実践共同体、もしくは地域文化の可能態」『社会人類学年報』42、弘文堂、2016 年、31－50 頁。
② 橋本裕之「協働する共同体へ－民俗芸能を復興する／させる方法の可能性－」『舞踊學』38、舞踊学会、2016 年、106－112 頁。
③ 橋本裕之「無形民俗文化財の社会性－現代日本における民俗芸能の場所－」『追手門学院大学地域創造学部紀要』1、追手門学院大学地域創造学部、2016 年、121－131 頁。
④ Ken MIICHI “Playful Relief: Folk Performing Arts in Japan after the 2011 Tsunami,” *Asian Ethnology* 75-1, 2016, 139-162.
⑤ 井出明「ダークツーリズムと観光学」『進化経済学論集』20、進化経済学会、2016 年、1－8 頁。
⑥ 井出明「ダークツーリズムの真価と復興過程－“復興”のさらに先にあるもの－」『復興』13、日本災害復興学会、2015 年、49－56 頁。

〔学会発表〕（計１５件）
① 井出明「日本型ダークツーリズムの確立と東北の復興を目指して」、進化経済学会第 21 回大会、2017 年 3 月 26 日、京都大学。
② Shin NAKAGAWA “Urban Resilience” The 15th Urban Culture Research Forum in Yogyakarta, 2017/2/22, Gadjah Mada University, Yogyakarta, Indonesia.
③ Shin NAKAGAWA “Socially Inclusive Arts Management in Japan” The 11th International Conference of Asian Arts Management, 2016/12/7, Yangon, Myanmar.
④ Akira IDE “Japanese Characteristics of Dark Tourism” The 33rd International Geographical Congress, 2016/8/23, Beijing, China.
⑤ Shin NAKAGAWA “Encountering the Dialogue between Researchers and Practitioners” The 10th International Conference of Asian Arts Management, 2016/3/17, De La Salle University, Manila, Philippines.
⑥ Shin NAKAGAWA “A New Community Management through Arts and Culture” The 14th Urban Culture Research Forum, 2016/2/23, Gadjah Mada University, Yogyakarta, Indonesia.
⑦ 中川眞「コミュニティを編み直す」、アートミーツケア学会 2015 年度大会、2015 年 11 月 7 日、大分大学。
⑧ Shin NAKAGAWA “Listening to the Unheard Voices” The 13th Urban Culture Research Forum, 2015/3/5, Gadjah Mada University, Yogyakarta, Indonesia.
⑨ Hiroyuki HASHIMOTO “Restoration of Communities through Folk Performing Arts: Kagura Performers after the Great Tokoku Earthquake” The 13th Urban Cultural Research Forum, 2015/3/5, Gadjah Mada University, Yogyakarta, Indonesia.
⑩ Shin NAKAGAWA “Introduction to Socially Inclusive Arts Management” The 9th International Conference of Asian Arts Management, 2014/12/16, MAP Publika, Kuala Lumpur, Malaysia.
⑪ Hiroyuki HASHIMOTO “From Intangible Cultural Properties to Intangible Cultural Heritage: Folk Performing Arts after the Great East Japan earthquake,” Safeguarding Traditional Arts as Intangible Cultural Heritage: East Asian and American Perspectives Conference, 2014/12/10, Honghe University, Mengzi, China.
⑫ 井出明「ダークツーリズムとアートマネジメント」、アートマネジメント学会第 16 回全国大会、2014 年 11 月 30 日、実践女子大学日野キャンパス。
⑬ Shin NAKAGAWA “Locating Arts Carefully: Mechanism for Increasing Social Accessibility” The 2nd International Conference for Asia pacific

Arts Studies, 2014/10/31, Institut Seni Indonesia, Yogyakarta, Indonesia.
⑭ Hiroyuki HASHIMOTO "On Ritualistic Responses to the Great East Japan Earthquake of 2011," Survivor-Centered Responses to Massive Disasters: Healing through Narrative and Local Knowledge Conference, 2014/7/3, The Rockfeller Foundation Ballagio Center, Bellagio, Italy.
⑮ Hiroyuki HASHIMOTO "Restoration of Communities through Folk Performing Arts: Kagura Performers after the Great Tokoku Earthquake," ICAES 2014 with JASCA, 2014/5/17, Makuhari Messe, Chiba.

〔図書〕（計９件）
① 橋本裕之「蠅としての民俗学者―無形文化遺産におけるよそ者の役割」『文明史の中の文化遺産』、臨川書店、2017 年、337－363 頁（376 頁）。
② 中川眞「アジアを視野にいれた社会包摂型アーツマネジメントの形成に向けて」『包摂都市のレジリエンス』、水曜社、2017 年、99－110 頁（246 頁）。
③ 橋本裕之「大槌町の郷土芸能、それでも前へ進む。」『大槌発 未来へのグランドデザイン―震災復興と市域の自然・文化』、昭和堂、2016 年、204－233 頁（256 頁）。
④ 橋本裕之「支援から協働へ」『災害文化の継承と創造』、臨川書店、2016 年、272－294 頁（322 頁）。
⑤ 中川眞「アートによる社会包摂？」『地域に根ざしたアートと文化』、共同事業体、2016 年、29-43 頁（237 頁）。
⑥ 中川眞「現代社会におけるアートの位置―社会包摂型アーツマネジメントの可能性―」『市大都市研究の最前線』、大阪市立大学都市研究プラザ、2016 年、76-84 頁（102 頁）。
⑦ Ken MIICHI "Saving Performing Arts For the Future: Challenges for Unotori Kagura After the Great East Japan Earthquake in 2011," The Consequences of Disasters: Demographic, Planning, and Policy Implications, 2016, 157-167(414).
⑧ 橋本裕之『震災と芸能―地域再生の原動力―』、追手門学院大学出版会、2015 年、271 頁。
⑨ 見市建「土地を彩る芸能―中野七頭舞―」岩手県立大学総合政策学部編『いわて地誌アーカイブ１ 岩泉・海と小本』、イー・ピックス、2014 年、31 頁（212 頁）。

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本　裕之（HASHIMOTO, Hiroyuki）
追手門学院大学・地域創造学部・教授
研究者番号：７０２０８４６１
(2)研究分担者
中川　真（NAKAGAWA, Shin）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：４０１３５６３７
井出　明（IDE, Akira）
追手門学院大学・経営学部・准教授
研究者番号：８０３４１５８５
見市　建（MIICHI, Ken）
岩手県立大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：１０４５７７４９